

税からもらった命

守谷市立愛宕中学校3年 大平 あやの

国民の二人に一人ががんになるということはよく知られている。また、小児がんにかかる子どもは十万人に一人程度であるそうだ。偶然にも、その十万人に一人になってしまった私は、税金に命をもらった一人でもある。

病気であることがわかった時、治療の不安と同時に、高額な治療費の負担に関する心配が私の脳裏をよぎった。がんの治療費は、抗がん剤や先進医療のために時には一月あたり数百万円にもなることがあるという。

「もし、私に必要な治療が経済的な問題のためにできなかつたら？」
これから必要となる治療費の問題は、両親ばかりではなく、私にとっても気がかりなことだった。しかし、本格的な治療が始まる前に「小児がんは大人のがんと比較して、治療効果が高い。また、小児慢性特定疾病医療の対象となり、治療費が高額になる心配はない。」と、説明があった。治療を受けるための公的な支援があることを知り、「がんイコール高額な治療費」というイメージを持っていた私は、どんなに勇気づけられたか分からない。

あまり知られていないことかもしれないが、小児がんの治療では、医療的な関わりの他にも、臨床心理士によるカウンセリング、院内学級による教育環境の確保、行き届いた看護体制など、多角的な支援体制が整えられており、病院では治療を受けながら勉強を続けることができる。

入院生活を通じて、特に印象的だったのは、この院内学級の存在によって、教育を受ける権利が保障されていたことだ。私は入院中も勉強を続けることを希望し、入院と同時に院内学級に転校した。転校後は院内に併設された教室で友人と学び、また、症状が良くない日は先生が私のベッド脇で授業を行ってくださった。一対一で授業を受け、先生とたくさん会話ができる環境に恵まれたことが、治療に前向きに臨むための原動力になった。

そして、私は今、思う。私はなぜ生きていられるのか。私が、もし、違う国、違う時代に生まれていたら、生きていられたらどうか。病気になった私は不幸だったか。安心して治療を受けられた幸運。日本に生まれた偶然。それらが重なったことは、幸せとしか言いようがないと思う。

現在、私は公立中学校に通い、社会の時間に税の意義や役割について学習し、身近な税の使い道として「平等な教育のため」「社会保障の充実」ということがあるのを学んだ。私は、まさにこの恩恵を受けて、たとえ病室にいても学び続けながら、必要な医療を受けることができた。そうだ、私の命はつらい治療を乗り越えたからだけではなく、税からもらったものでもあるのだ。そのことに気づかせてくれたこともまた、税金が教育費に投じられ、私が良い教育環境と先生方に恵まれた証だ。税が活きた使い方をされている証だ。私は、改めてこのことに感謝している。